Brief communication
［査読有り］　短 報

道徳的高揚と道徳的アイデンティティ
―日本におけるAquino et al. (2011)のStudy 4の概念的追試―

Moral elevation and moral identity
― A conceptual replication of Study 4 of Aquino et al. (2011) in Japan ―

竹部 成崇
大妻女子大学文学部

Masataka Takebe
Faculty of Humanities, Otsuma Women's University
12 Sanban-cho, Chiyoda-ku, Tokyo, 102-8357 Japan

キーワード：道徳的高揚，道徳的アイデンティティ，向社会的行動，追試，文化差
Key words：Moral elevation, Moral identity, Prosocial behavior, Replication, Cultural difference

抄録

道徳的高揚とは、他者を思いやる卓越した行為を目撃した際に経験される、心温まる高揚的な感情である。この感情は向社会的行動を促進するため、社会における善行の伝染を説明しうる独特な感情と言えよう。しかし、日本において道徳的高揚を定量的な手法で扱った研究はまだない。そこで本研究では、道徳的高揚の喚起度を調整する個人差要因と、道徳的高揚の向社会的行動への影響を同時に検討したAquino et al.（2011）のStudy 4の概念的追試研究を行った。実験ではまず、道徳的アイデンティティを測定し、その後、非凡な善行、あるいは善行とは無関連なポジティブな出来事が描かれている記事を読んでもらい、道徳的高揚とポジティブ感情を測定した。最後に、実験とは無関連と教示された架空のオンライン調査への協力依頼に回答してもらった。この依頼は向社会的行動を測定するために行われた。分析の結果、非凡な善行が描かれている記事を読んだ参加者の方が、単にポジティブな出来事が描かれている記事を読んだ参加者より、道徳的高揚を強く感じていた。ポジティブ感情については差がなかった。また、元研究と同じく、道徳的アイデンティティが高い人ほど、道徳的高揚を強く感じていた。しかしそのように機能する道徳的アイデンティティの側面は、元研究と異なり、内在化という側面（道徳的であることが自身の自己定義の中心にある程度）ではなく、象徴化という側面（道徳的であることが公的に表れている程度）であった。また、向社会的行動への影響は見られなかった。機能する道徳的アイデンティティの側面が異なった原因としては、文化差、記事の内容の差異、実験状況の差異が考えられる。向社会的行動への影響が見られなかった理由としては、道徳的高揚が元研究ほど喚起していなかった可能性、向社会的行動の測定方法が適切でなかった可能性が考えられる。これらを踏まえ、今後の展望を議論した。

1．はじめに

2010 年 12 月 25 日、「伊達直人」を名乗る匿名の 30 代の男性が、ある児童相談所へランドセル 10 個を送った。この出来事はメディアでも取り上げられ、話題になった。するとこれを皮切りに、全国各地の児童養護施設へ、様々な「伊達直人」からの寄付行為が相次いだ[1]。また、アメリカを中心として、世界では Random Act of Kindness という運動が行われている[2]。これは、見ず知らずの他人に、名乗ることなく、思いがけないとき、思いがけない場所で、親切な行いをしようという運動である。この運動に関する体験記[3]では、そうした他者の親切を目撃した際、温かい気持ちになり、自分も誰かに親切な行いをしたという声が聞かれている。

こうした事例が示すように、善行はしばしば社会において伝染する。こうした善行の伝染を説明

しうるものとして、道徳的高揚（moral elevation）という感情が挙げられる。道徳的高揚とは、予期せぬ人間の善良さ・親切・思いやりが表れている行為を目撃した際に経験する、心温まる高揚的な感情であり[4]、胸がいっぱいになる、筋肉の弛緩、涙といった身体的反応を伴う[5]。初期の研究では、慈善行為・親切・愛・思いやり・許し・感謝・勇気・忠誠・自己犠牲など、美徳を強く示す行為すべてが先行因となると主張されていたが[4][6][7]、その後は、他者をケアする行為が最も強力な先行因であると議論されている[8]。また、そうした行為が卓越している、すなわち、稀であったり、極端であったり、目を見張るようなものであったり、あるいは目撃者の予想を何らかの形で覆したりする場合に喚起しやすいとも議論されている[9]。このように道徳的高揚は他者を思いやる行為を目撃した際に経験される感情であるが、この感情を経験した目撃者もまた、他者を思いやる行動を取りやすくなることが示されている。例えば、実験的に道徳的高揚を喚起させると、その後の追加課題でのボランティア[10][11]・寄付行動[12][13][14]・臓器ドナー登録意図[15]・経済ゲームにおける協力[16]などの向社会的行動が促進されることが示されている[17]。こうしたことから、道徳的高揚は社会における善行の伝染を説明しうる感情と言えよう。

なお、道徳的高揚と類似する感情として、感謝（gratitude）・称賛（admiration）・畏敬（awe）が挙げられる。道徳的高揚を含むこれらの感情は、他者称賛感情（other-praising moral emotions）に属すると言われる[7]。しかし、道徳的高揚は「自分自身以外」に向けられた他者の善行によって喚起するのに対し、感謝は「自分自身」に向けられた他者の善行によって喚起する。また、感謝は特定の他者との関係の深化を促す一方[18]、道徳的高揚はより良い人間になりたいという一般的な関心を促す[13]。称賛や畏敬は喚起要因が「他者の善行」ではない。称賛は他者の非凡な「能力・達成」によって喚起し、畏敬は自己の理解を超えた「広大さ」、例えば広大な自然や宇宙などによって喚起する。畏敬も向社会的行動を促進するが、その理由は道徳的高揚と異なり、自己の小ささ・無力感を感じるためである[19]。こうした点などから、道徳的高揚は 1 つの独特な感情であると議論されている[17]。

また、道徳的高揚は嫌悪感情の対極に位置するものと概念化されている[20]。道徳的高揚は他者の道徳的に美しい行為を目撃した際に経験されるポジティブな感情である一方、社会的嫌悪は他者の道徳に反する行為を目撃した際に経験されるネガティブな感情であるためである。そのため、嫌悪が排斥行動を促進するのと反対に、道徳的高揚は排斥行動を抑制する可能性も議論されている[21]。このような概念化や研究潮流も、他の他者称賛感情と異なる点である。

以上のように、道徳的高揚は 1 つの独特な感情として研究が進められているものの、多くは欧米で行われており、その先行因や調整要因が様々な国・文化において同様であるかどうかはまだ十分に明らかではない[17]。特に、日本において道徳的高揚を定量的な手法で扱った研究はまだない。道徳的高揚に関する初期の研究では、様々な背景を持つ 15 人の日本人に対して、道徳的高揚を感じた経験があるかどうか、インタビューを行った結果が報告されている[4]。回答者は、不良の若者がお年寄りのために席を譲ったとき、マザー・テレサに関するニュースを見たとき、映画『タイタニック』で沈みゆく船の中、乗客を落ち着かせるために自らの危険を顧みず演奏を続ける音楽家たちを見たとき、といった様々な場面を挙げ、感動し、胸がいっぱいになったり、涙を流したりしたと述べていた。このことから、日本人も他者の非凡な、あるいは予想を超える善行を目撃した際に、道徳的高揚を感じると考えられる。しかし、欧米で道徳的高揚の喚起度を調整することが示されている要因が日本においても同様に機能するのか、日本においても道徳的高揚が向社会的行動を促進するのか、などは不明である。

そこで本研究では、Aquino ら[12]の Study 4 の概念的追試研究を日本で行った。これを追試対象として選定した理由は 2 つある。第 1 に、これが道徳的高揚の喚起度を調整する個人差要因（i.e., 道徳的アイデンティティ）と、道徳的高揚の向社会的行動への影響を同時に検討していたためである。第 2 に、彼らの論文は心理学領域で著名な雑誌（i.e., Journal of Personality and Social Psychology）に掲載されており、被引用数も多く、影響力の大きい論文であったためである。次節では、元研究の背景と内容を簡潔に説明する。

1.1.　道徳的アイデンティティと道徳的高揚

道徳的アイデンティティとは、道徳的であるこ

とが個人の自己定義の中心にある程度を説明する概念である[22]。Aquino と Reed[23]は、9 つの道徳特性語（e.g., caring, compassionate, fair）を提示し、それらの特性に関する 10 個の文章（e.g., “Being someone who has these characteristics is an important part of who I am”）それぞれに対してどの程度同意するかを尋ねることによって道徳的アイデンティティの個人差を測定する、道徳的アイデンティティ尺度を開発した。Reed ら[24]は、この尺度によって測定された道徳的アイデンティティが、お金による援助よりも時間による援助を高く評価する傾向と関連することを示した。努力を要する行為は受け手に対する配慮の現れと知覚されやすいこと[25]を踏まえると、この結果は、道徳的アイデンティティが高い個人ほど、他者の福利への配慮に敏感であることを示唆している[24]。

この知見を基に Aquino ら[12]は、道徳的アイデンティティは他者の善行を目撃した際に喚起する道徳的高揚の程度とも関連するだろうと予測し、複数の実験でこれを検証した。例えば Study 4 では、道徳的アイデンティティを測定した後、非凡な善行が描かれた映像あるいは普通の映像（i.e., 善行が描かれていない映像）を見せ、最後に寄付の機会を与えた。その結果、道徳的アイデンティティが高い人ほど、非凡な善行が描かれた映像を見た後に道徳的高揚を強く感じていた。また、道徳的アイデンティティが高い人においては、非凡な善行の目撃が道徳的高揚を介して寄付金額を高めるという媒介効果が見られた。Aquino ら[12]は他の研究でも一貫して、道徳的アイデンティティが道徳的高揚の喚起度と関連することを示している。

ただし重要なことに、道徳的高揚の喚起度と関連していたのは、道徳的アイデンティティの 2 つの側面のうちの片方のみであった。道徳的アイデンティティ尺度を開発した Aquino と Reed[23]は道徳的アイデンティティを、内在化（internalization）と象徴化（symbolization）という 2 つの側面に区分していた。前者は、道徳的であることが自身の自己定義の中心にあると「自分自身がどれほど感じているか」を表すものであり、「Being someone who has these characteristics is an important part of who I am」といった項目にどれほど同意するかを尋ねることで測定される。後者は、道徳的であることが「公的にどれほど表れているか」を表すものであり、「The kinds of books and magazines that I read identify me as having these characteristics」といった項目にどれほど同意するかを尋ねることで測定される。Aquino ら[12]は道徳的高揚と道徳的アイデンティティの関連を検討する際、道徳的アイデンティティの個人差を測定した研究を 3 つ行っているが、そのすべてにおいて、道徳的高揚の喚起度と関連していたのは前者の内在化のみであった。これは、内在化の方が主観的あるいは個人的状態・経験と、より強く関連するためであると考えられている[12]。このように、カナダ人を参加者とした Aquino ら[12]の研究では、道徳的アイデンティティの内在化という側面のみが、道徳的高揚の喚起度と関連することが示されている。

1.2.　本研究の概要

上述したように、国外では道徳的高揚は 1 つの独特な感情として研究が進められているものの、日本においてこれを定量的な手法で扱った研究はまだない。そこで本研究では、道徳的高揚の喚起度を調整する個人差要因と、道徳的高揚の向社会的行動への影響を同時に検討した Aquino ら[12]の Study 4 の概念的追試研究を行った。具体的には、道徳的アイデンティティを測定した上で、他者の非凡な善行、あるいは善行とは無関連な出来事に関する記事を読ませ、道徳的高揚を測定し、最後に向社会的行動の機会を与えた。なお、Aquino ら[12]の Study 4 では映像により非凡な善行の目撃を操作していた一方、本研究では記事を用いたのは、本研究は教場で質問紙を配布し、一斉に回答してもらうという形式で行うことが予め決められていたためであった。

元研究に倣えば、結果は以下の通りになることが予測された。第 1 に、道徳的高揚に対して道徳的アイデンティティの内在化という側面と読む記事の種類の交互作用効果があるだろう。すなわち、非凡な善行に関する記事を読んだ場合の方が善行とは無関連な記事を読んだ場合より道徳的高揚を強く感じる傾向は、内在化が高い人において顕著だろう。第 2 に、向社会的行動に対しても同様の交互作用効果があり、非凡な善行に関する記事を読んだ場合の方が善行とは無関連な記事を読んだ場合より向社会的行動を行いやすいという傾向は、内在化が高い人において顕著だろう。第 3 に、内在化が高い人において、非凡な善行の目撃が道徳的高揚を介して向社会的行動を促進するという媒

介効果が見られるだろう。ただし、Aquino ら[12]の Study 4 では 2 つ目の予測は支持されなかった。しかし彼らは、媒介効果の検証に際して 2 つ目の予測が支持されることは必須ではないという近年主流の立場から[26]、3 つ目の予測の検証も行い、これを支持する結果を得ている。そこで本研究でも、2 つ目の予測が支持されるか否かにかかわらず、3 つ目の予測も検証することとした。

２．方法

実験は 2017 年 11 月に行われた。

2.1.　参加者と実験計画

168 名の日本の大学生が実験に参加した。なお分析では、実験に対して懐疑的なコメント（e.g.,「うそうそうそ」という走り書き）を記述した 3 名を除いた 165 名のデータを用いた（女性 52 名，男性 113 名, M_{age} = 19.46, SD_{age} = 1.21）。

実験計画は、記事に描かれている出来事（非凡善行／ポジティブ）×道徳的アイデンティティの個人差（内在化・象徴化）であった。統制条件としてニュートラルな記事ではなく、ポジティブな記事を読ませる条件を設けたのは、非凡な善行を読んだ際にポジティブ感情も生じる可能性があるためであった。実際に Aquino ら[12]の Study 1 でも、統制条件としてポジティブ条件が設けられていた。

2.2.　手続き

実験は可能な限り、Aquino ら[12]の Study 4 に近い手続きで行った。彼らは参加者に、本研究はブランド・商品・メディアについて検討することが目的であると教示した。参加者はまず、道徳的アイデンティティを測定する尺度やデモグラフィック変数に関する質問に回答した。続いて、研究目的とは無関連のことについて回答した。なお、これに関する具体的な内容は論文に記載されていない。その後、非凡な善行が描かれた映像あるいは描かれていない映像を見せ、道徳的高揚およびポジティブ感情をどの程度感じたかを測定した。最後に、実験参加報酬である 15 ドルを地元の慈善団体に寄付する機会が与えられた。つまり元研究は、最初に道徳的アイデンティティを測定し、次に目的と無関連な課題を行ってもらった後、非凡な善行の目撃の操作・感情の測定・向社会的行動の測定を行うという流れで行われた。

本研究も同様の流れで行った。具体的には、本研究は様々な方法で測定された個人的特徴の関連を検討することが目的であると教示した。参加者はまず、道徳的アイデンティティ尺度を含む 3 つの尺度に回答した。続いて、フィラー課題として、9 つの点を一筆書きでつなぐ課題を行った。その後、非凡な善行あるいはポジティブな出来事が描かれた記事を読んだ。記事は実際には架空のものであった。続いて、記事を読んで道徳的高揚およびポジティブ感情をどの程度感じたかを回答した。最後に、本実験とは無関連と教示された架空のオンライン調査への参加依頼に回答した。この依頼は向社会的行動を測定するために行われた。

2.3.　道徳的アイデンティティの測定

Aquino と Reed[23]の道徳的アイデンティティ尺度を河村ら[27]が邦訳して作成した日本語版道徳アイデンティティ尺度を用いた。参加者は初めに 9 つの道徳特性語（e.g., 優しい、正直、誠実）を提示され、それらの特性に関する 10 個の文章それぞれについて、どれほど当てはまるかを 7 件法（1.まったく当てはまらない～7.とてもよく当てはまる）で回答した。10 項目のうち 5 項目が内在化という側面を測定する項目であり（e.g., これらの特徴を持った人物であることは、私が私であるための重要な一部分である）、他の 5 項目が象徴化という側面を測定する項目であった（e.g., 読む本や雑誌の種類から、私がこれらの特徴を持っているとわかるだろう）。内在化と象徴化の信頼性係数はそれぞれ、α = .75、.76 であった。

なお、河村ら[27]は内在化を測定する項目のうちの 1 つは負荷量が.10 と低かったため、それを削除していた。しかし本研究では、その項目の負荷量は.56 と比較的高く、他の項目の負荷量（.63～.86）と比べても格段に低いということはなかったため、また、削除しても α 係数はほとんど変わらなかったため（.75→.75）、削除しなかった。内在化と象徴化それぞれについて、5 項目を合算平均し、分析で用いることとした。

2.4.　記事内容

記事は Aquino ら[12]の Study 1 を参考に作成した。しかし最終的に、本研究の非凡善行条件の記事内容は、非凡な善行が描かれているという点以外は、元研究とほぼ完全に異なる内容となった。理由は、

Aquino ら[12]の Study 1 の非凡善行条件の記事は、日本人にとって馴染みがない話であったためである。具体的には、チャールズ・ロバーツという人物がアーミッシュという北米に暮らすキリスト教コミュニティの学校で銃を乱射し、5 人を殺害し、5 人を負傷させた後、自殺したという話であった。記事では、子どもたちが殺害された数時間後に、複数のアーミッシュがロバーツの未亡人を尋ね、許しを与え、同情を表し、後に彼女と彼女の子どもたちに財政的支援を提供した様子が描写されていた。宗教性や文化の違いなどから、この内容は日本の人々にとって理解が難しいと思われたため、本研究では記事の内容を以下の通りとした。

「間一髪　通行人が女性を救助」

2007 年 5 月 19 日午後 7 時 20 分頃、閉散とした JR 北長瀬町の踏切にて、子供を抱いて線路に立つ 30 代の女性がいた。女性は急いでいたのか、少し悩んだ後、子どもの手を引いて遮断機の閉まり始めている踏切を渡り始めた。後のインタビューで女性は、「仕事が終わって子どもを保育園に迎えに行ったところで、自宅の母が自宅前で倒れているという電話が入った。一刻も早くかけつけたいと思うあまり、遮断機が閉まり始めているが、まだいけると思って、渡ってしまった」と語っている。

しかし、踏切を渡っている最中、子どもが段差につまずいて、転んでしまった。女性は立ち止まって子供を抱き起こした。子どもは顔から転んだため、口を怪我していた。女性が心配し、子どもをなだめていたところ、背中側から電車の大きな警笛が聞こえた。電車が向かってくる方向とは反対側を向いていたため気がつかなかったが、振り返ったときには、もう数 10 メートル先まで電車は近づいていた。女性は子供を抱えたまま、恐怖のあまり動けなくなってしまった。

会社から車で帰宅していた平田祐輔さん（26 歳）は、ちょうどそのとき、その踏切の前に着いた。踏切前で停車した平田さんは、女性と子どもが踏切内で立ちすくんでいるのを発見し、急いで車を飛び出した。非常停止ボタンを押しても間に合わないと判断した平田さんは、遮断機をまたぎ、女性と子どもを背後から抱きかかえ、線路の外へなんとか飛び出した。そのわずか 2 秒後に、電車が通過していったという。平田さんは、「車を飛び出してからは無我夢中でよく覚えていない。間に合ってよかった」と語っている。

間一髪のところで幼い子と母を救った平田さんの行動に、日本中から称賛の声があがった。

ポジティブ条件の記事内容は Aquino ら[12]の Study 1 のポジティブ条件の記事内容と同様であった。具体的には、ある夫婦が信じられないほど美しい夕日を見たという話であった。実際に用いた記事内容全文を以下に示す。

「日本の絶景　知床半島の夕日」

科学技術が進歩し、海外へも気軽に、そして低価格で行くことができるようになったが、日本にも海外に負けない絶景がある。

前田さん夫妻は今年の 10 月に、長年行きたいと願っていた知床半島をまわるツアーに参加した。知床半島といえば、ヒグマ・イルカなどの野生動物、冬の流氷、知床五湖が見せる四季折々の表情などが有名である。だがそれだけではなく、夕日の素晴らしさも最近注目を集めている。

知床半島へいくのは少し時間がかかる。今回の知床半島をめぐるツアーでは、東京を飛行機で出発し、女満別の空港へ。その後、バスと電車を乗り継ぎ、約 2 時間かけてようやく知床半島に到着。知床半島についてからは、名所の滝をめぐった。そして夕刻、素晴らしい夕日が見えるという、知床国設野営場の一角にある夕陽台に移動した。到着してしばらくすると、太陽が徐々に水面に近づいていった。時間とともに、ゆっくりと夕焼けが海に広がる。大きなオレンジ色の太陽は海面にその複製を写し、海面に写った太陽はゆらゆらとノスタルジックに揺れる。視界を遮るものはひとつもなく、茫洋と広がるのは沈みゆく夕日と赤く燃え上がる空。海を焦がす夕焼けの光は、どこまでも光り輝く道のようだ。

波の音だけが繰り返し響く中、妻である前田聡子さんは「わたしたちはこんなにも美し

い景色を生まれてからはじめて見ました…。雄大な自然を見て、なんだか力が湧いたような気がします。このような素晴らしい景色を夫と一緒に見ることができて本当によかったです。この体験は一生の思い出になりました」と、語った。

みなさんも知床半島の夕日に出会いに行ってみてはいかがだろうか。きっと、素晴らしい景色があなたを待っているだろう。

なお、分析ではポジティブ条件を 1、非凡善行条件を 2 として扱った。

2.5.　道徳的高揚の測定

Aquino ら[12]の Study 4 と同様の方法を用いた。具体的には、「感情的反応」「人間に対する見方」「より良い人間になりたいという欲求」に関する項目について、5 件法（1.まったく当てはまらない～5.とてもよく当てはまる）で回答してもらった。また、「身体的反応」の有無について、「はい」か「いいえ」で回答してもらった。具体的な項目と α 係数を表 1 に示す。なお、これらの項目は著者自身が翻訳したものであった。身体的反応の信頼性係数が低かったが、Aquino ら[12]に倣い、それぞれを標準化した後、合算平均して分析で用いることとした（α = .85）。

2.6.　ポジティブ感情の測定

日本語版 PANAS[28]で使用されているポジティブ語 8 項目（i.e., 活気のある, 誇らしい, 強気な, 気合いの入った, さっぱりとした, わくわくした, 機敏な, 熱狂した）が現在の気分にどれほど当てはまるかを、それぞれ 5 件法（1.まったく当てはまらない～5.とてもよく当てはまる）で尋ねた。8 項目を合算平均し、分析で用いることとした（α = .86）。

2.7.　向社会的行動の測定

質問紙の最後に、本実験とは無関連と書かれた架空のオンライン調査への参加依頼書を添付した。依頼書では、実験者が所属する研究室が調査提携している社会福祉政策研究室に所属する大学院生が、薬物依存者の更正を支援するプログラム作成に必要なオンライン調査への協力を募っていた。また、回答をしてもらえると、よりプログラムを充実させることができ、薬物依存者の更正に繋がると説明されていた。参加者は調査に協力する場合はメールアドレスを記入した。

表 1.　道徳的高揚を測定する項目

感情的反応（α = .77）
思いやりを感じた
感化された
崇高さや偉大さを感じた
感嘆した
人間に対する見方（α = .82）
世の中まだまだ捨てたもんじゃない
人は本当に素晴らしい
世界はやさしさと寛大さに満ちている
多くの人々の行動は立派だ
なんていい人だ
より良い人間になりたいという欲求（α = .86）
私はこの記事に載っている人々のようになっていきたいと思った
この記事は私に、どのようにすればより良い人になれるかを教えてくれた
私はこの記事の話を見習ってみようと思う
私はもっと他者を助ける必要がある
私は記事に載っている人々から多くを学ぶことができる
記事に載っている人々は私の新しいお手本だ
身体的反応（α = .48）
気持ちが明るくなった
胸が温かくなった
目に涙が浮かんだ
胸に熱いものがこみあげてきた
鳥肌がたった

向社会的行動をこのように測定した理由は 2 つあった。まず 1 つは、本研究は教場で質問紙に一斉に回答してもらう形式で行われたためである。そのため、Aquino ら[12]の Study 4 のように実際に参加者に寄付の機会を与えることが難しかった。そこで、苦しむ人への助けとなる調査へ協力する機会を与えることとした。

2 つ目の理由は、Aquino ら[12]の Study 4 でも、道徳的高揚が向社会的行動に及ぼす影響を検出しやすくするために、向社会的行動の受益者を参加者との心理的距離が遠く、同情を引き起こしにくい対象としていたためである。具体的には、Aquino ら[12]は、罪を犯して刑務所に入ってしまったカナダの先住民（アボリジニ）の更生を支援する非営利組織への寄付の機会を与えた。そこで本研究では、薬物依存者の更生の支援へと繋がる調査に回答する機会を与えた。

３．結果

媒介効果を検証する分析では、SPSS の PROCESS マクロ v3.4 の Model 59[29]を用いた。それ以外の分析では HAD15.200[30]を用いた。

3.1.　記述統計

各変数の平均値と標準偏差および相関係数を表 2 に示す。

3.2.　操作チェック

道徳的高揚について、記事に描かれている出来事を独立変数とした Welch の t 検定を行ったところ、条件間で有意な差が見られた（$t(157.19) = 4.70$, $p < .001$, $d = 0.73$）。具体的には、図 1 の通り、非凡善行条件の方が（$M = 1.12$, $SD = 3.47$）ポジティブ条件より（$M = -1.17$, $SD = 2.75$）、道徳的高揚を有意に強く感じていた。

ポジティブ感情について同様の t 検定を行ったところ、図 2 の通り、非凡善行条件と（$M = 2.54$, $SD = 0.72$）ポジティブ条件の間に（$M = 2.58$, $SD = 0.76$）有意な差は見られなかった（$t(161.72) = 0.31$, $p = .76$, $d = 0.05$）。

以上より、操作は成功していたと言えるであろう。

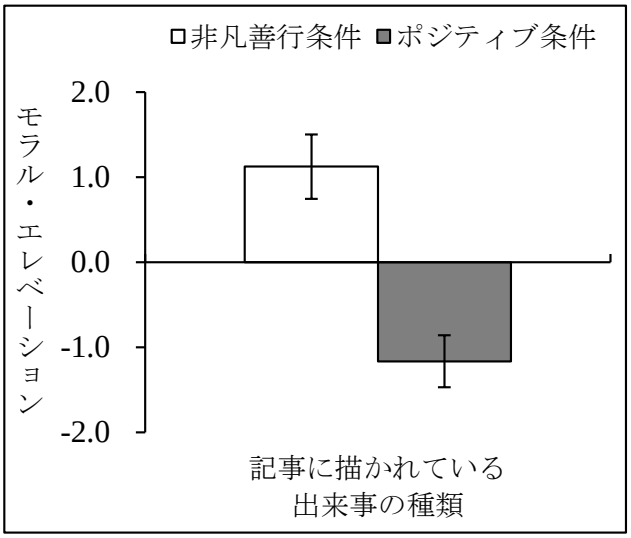
3.3.　道徳的高揚への影響

道徳的高揚について、記事に描かれている出来事、内在化、象徴化、およびそれらの交互作用項

表 2. 各変数の平均値と標準偏差および相関係数

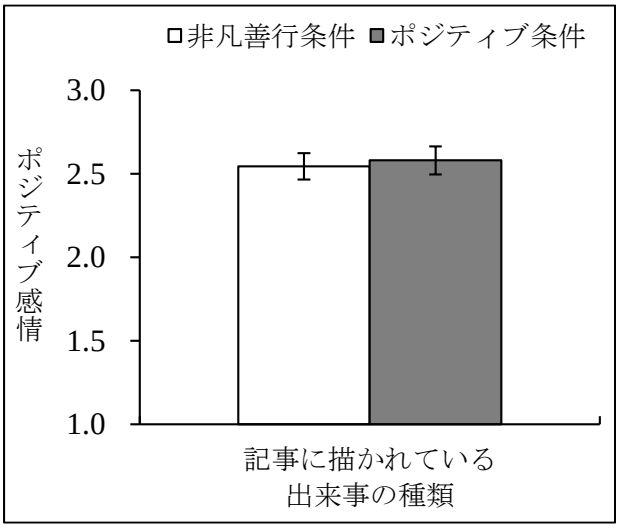
	平均値	標準偏差	1	2	3	4	5	6	7
1 性別	1.32	0.47	—	.01	.09	.14	.05	.17*	.11
2 ポジティブ感情	2.56	0.73		—	−.02	.29**	.36**	.41**	.02
3 出来事	1.51	0.50			—	−.03	.01	.34**	.06
4 内在化	4.95	1.10				—	.40**	.23**	.16*
5 象徴化	3.03	1.05					—	.29**	.09
6 道徳的高揚	0.00	3.33						—	.10
7 向社会的行動	0.27	0.45							—

※ 性別は 1 = 男性、2 = 女性。出来事は 1 = ポジティブ条件、2 = 非凡善行条件。向社会的行動は 0 = メールアドレス未記入、1 = メールアドレス記入。* $p < .05$。** $p < .01$。



※ エラーバーは標準誤差

図 1. 記事に描かれている出来事の種類ごとの道徳的高揚の値



※ エラーバーは標準誤差

図 2. 記事に描かれている出来事の種類ごとのポジティブ感情の値

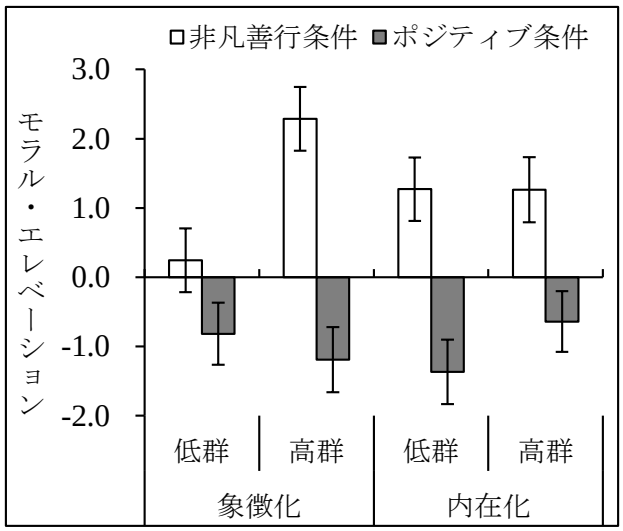
（出来事×内在化、出来事×象徴化）を独立変数、性別（1＝ 男性、2＝ 女性）とポジティブ感情を統制変数とした重回帰分析を行った。その結果、表 3 に示す通り、出来事と象徴化の交互作用項が有意であった。

表 3. 道徳的高揚を予測する回帰分析の結果

	b	*SE*	*t*	*p*
性別	0.89	0.46	1.93	.05
ポジティブ感情	1.63	0.32	5.17	<.001
出来事	2.27	0.43	5.33	<.001
内在化	0.16	0.22	0.75	.46
象徴化	0.40	0.23	1.72	.09
出来事×内在化	−0.33	0.42	0.79	.43
出来事×象徴化	1.15	0.45	2.59	.01
Adj R^2		.36		

※ *b* は非標準化係数

出来事と象徴化の交互作用項が有意であったため、続いて単純傾斜効果検定を行った。その結果、図 3 の通り、象徴化高群（*M*＋1*SD* 地点）においては、非凡善行条件の方がポジティブ条件より道徳的高揚を有意に強く感じていた一方（$b = 3.48$, $SE = 0.63$, $t(157) = 5.51$, $p < .001$）、象徴化低群（*M*－1*SD* 地点）においては条件間の差は比較的小さく、有意ではなかった（$b = 1.06$, $SE = 0.63$, $t(157) = 1.68$, $p = .095$）。



※ エラーバーは標準誤差

図 3. 出来事および象徴化あるいは内在化の高低ごとの道徳的高揚の予測値

つまり、Aquino ら[12]と同じく、本研究でも道徳的アイデンティティが道徳的高揚の喚起度を調整する要因となっており、道徳的アイデンティティが高い人ほど、非凡な善行を知った際に道徳的高揚を強く感じていた。しかし、そのように機能するのは道徳的アイデンティティの内在化という側面ではなく、象徴化という側面であった。

3.4.　向社会的行動への影響

メールアドレスを記入したかどうか（0 ＝ 未記入、1＝ 記入）について、同様のロジスティック回帰分析を行った。その結果、表 4 に示す通り、すべての変数の影響が有意ではなかった。

表 4. 向社会的行動を予測する回帰分析の結果

	b	*SE*	*Z*	*p*
性別	0.46	0.39	1.18	.24
ポジティブ感情	−0.05	0.26	0.18	.85
出来事	0.19	0.38	0.51	.61
内在化	0.33	0.20	1.64	.10
象徴化	0.02	0.20	0.12	.91
出来事×内在化	0.03	0.39	0.08	.93
出来事×象徴化	0.73	0.40	1.85	.06
Cox-Snell R^2		.06		

※ *b* は非標準化係数

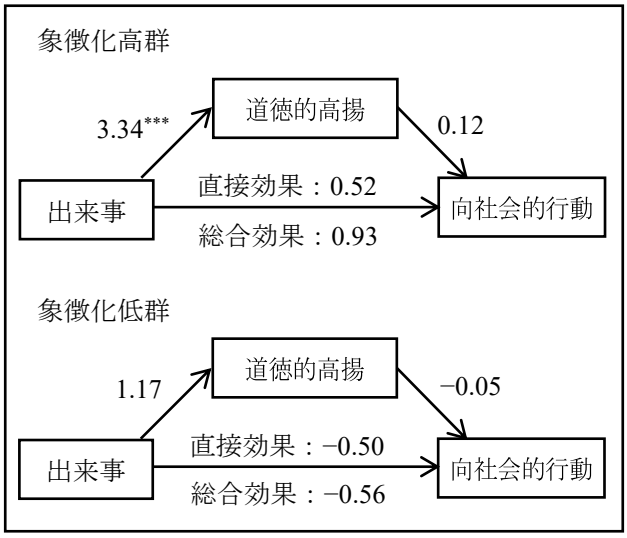
ただし、出来事×象徴化の効果が有意に近かったため、探索的に単純傾斜効果検定を行った。その結果、象徴化高群においても（$b = 0.96$, $SE = 0.58$, $Z = 1.65$, $p = .10$）、象徴化低群においても（$b = -0.57$, $SE = 0.54$, $Z = 1.06$, $p = .29$）、出来事の効果は有意ではなかった。しかし、象徴化高群においては有意に比較的近く、非凡善行条件の方がポジティブ条件よりメールアドレスを記入する確率が高めであった。

つまり、Aquino ら[12]と同じく本研究でも、道徳的アイデンティティと出来事の交互作用は有意でなかった。しかし、道徳的アイデンティティが高い人ほど非凡な善行を知った際に向社会的行動を取りやすいというパターンは予測と一致していた。ただし、そのように機能するのはやはり内在化という側面ではなく、象徴化という側面であった。

3.5.　媒介効果の検証

記事に描かれている出来事を独立変数、メール

アドレスを記入したかどうかを従属変数、道徳的高揚を媒介変数、象徴化を調整変数、性別とポジティブ感情を統制変数とした、ブートストラップ法（ブートストラップ標本数：10,000）による調整媒介分析を行った。Aquino ら[12]と異なり、調整変数を象徴化としたのは、ここまでの分析で、非凡な善行の目撃が道徳的高揚および向社会的行動に及ぼす影響を調整するのは、内在化ではなく象徴化であることが示されていたためであった。分析の結果、象徴化高群（$M+1SD$ 地点）においても（$b = 0.41$, 95%CI [−0.38, 1.37]）、低群（$M-1SD$ 地点）においても（$b = -0.06$, 95%CI [−0.35, 0.17]）、間接効果は有意でなかった。象徴化高群および低群における各パスの係数を図 4 に示す。



※ 数値は非標準化係数。*** $p < .001$。
図 4. 調整媒介分析の結果

この結果は、道徳的アイデンティティが高い場合のみ媒介効果が有意であったという Aquino ら[12]の結果とは異なるものであった。ただし、道徳的アイデンティティが低い場合より高い場合に媒介効果が強いというパターンは Aquino ら[12]と同じであり、道徳的アイデンティティが高い場合には媒介過程によって効果の約半分が説明されていた。

4．考察

本研究では、日本において道徳的高揚を定量的手法で扱った研究がまだないという現状に鑑みて、日本で Aquino ら[12]の Study 4 の概念的追試研究を行った。すなわち、日本においても、道徳的アイデンティティが高い人ほど、非凡な善行を知った際に（1）道徳的高揚を強く感じ、（2）向社会的行動を取りやすくなるかどうか、また、（3）道徳的アイデンティティが高い人において、非凡な善行の目撃が道徳的高揚を介して向社会的行動を促進するという媒介効果が見られるかどうかを検証した。

実験の結果、日本においても、道徳的アイデンティティが高い人ほど、非凡な善行を知った際に道徳的高揚を強く感じていた。しかし元研究と異なり、そのように機能するのは道徳的アイデンティティの内在化という側面ではなく、象徴化という側面であった。向社会的行動への影響や媒介効果については、パターンは予測と一致していたものの、有意には至らなかった。なお、これらについても、元研究と異なり、内在化ではなく象徴化という側面の方が機能していた。

4.1.　なぜ象徴化が機能したのか

1 つの可能性として、文化差が影響したことが考えられる。欧米諸国において主流である相互独立的自己観では、個人は根本的に他者から独立しているものと認知される。その結果、自分自身の知覚や主観的態度が思考・感情・行為の主要な決定因となりやすかったり、自身の内的な心理状態に注意が払われやすかったりする。他方、東アジア諸国において主流である相互協調的自己観では、個人は根本的に重要な他者との関係に埋め込まれているものと認知される。その結果、他者からの評価や、他者と共通で認識されている自己に注意が払われやすくなる[31][32]。

こうした議論に従うと、「自分自身が認識する自己」が感情経験に及ぼす影響力は、相互協調的な自己観を持つ東アジアより、相互独立的な自己観を持つ欧米において強い可能性が考えられる。他方、「他者と共通で認識されている自己」が感情経験に及ぼす影響は、相互独立的な自己観を持つ欧米より、相互協調的な自己観を持つ東アジアにおいて強い可能性が考えられる。実際に、Curhan ら[33]が行った研究の結果は、この可能性を支持している。彼らは、主観的社会的地位と客観的社会的地位が well-being に及ぼす影響の強さを、アメリカと日本で比較した。その結果、主観的社会的地位が well-being に及ぼす影響は日本よりアメリカにおいて強く、客観的社会的地位が well-being に

及ぼす影響はアメリカより日本において強かった。特に自己受容（self-acceptance）に対しては、日本においては、主観的社会的地位より客観的社会的地位が及ぼす影響力の方が強かった。同様の例として、Park ら[34]の研究が挙げられる。彼らは社会的地位と怒りの関連をアメリカと日本で検討した。その結果、アメリカでは主観的地位が怒りを予測していたのに対し、日本においては客観的地位が怒りを予測していた。こうした知見は、文化によって自己の各側面が感情経験に及ぼす影響力が異なることを示唆している。

このことを踏まえると、カナダで行われた Aquino ら[12]の研究では道徳的アイデンティティの内在化という側面が道徳的高揚の喚起度と関連していたのに対し、日本で行われた本研究では象徴化という側面が関連していたのも、それほど不思議ではないかもしれない。序論で述べたように、内在化は、道徳的であることが自身の自己定義の中心にあると「自分自身がどれほど感じているか」を表すものであり、「これらの特徴を持った人物であることは、私が私であるための重要な一部分である」といった項目で測定される。これは自己に関する主観的側面と言えるであろう。他方、象徴化は、道徳的であることが「公的にどれほど表れているか」を表すものであり、「読む本や雑誌の種類から、私がこれらの特徴を持っているとわかるだろう」といった項目で測定される。これは（あくまで自己認識ではあるものの）自己に関する客観的側面と言えるだろう。そのため、相互独立的な自己観を持つカナダにおいては内在化という側面が道徳的高揚という感情の喚起度に影響した一方、相互協調的な自己観を持つ日本においては象徴化という側面が影響したのかもしれない。

ただし、日本と同じ東アジアに属する中国において、内在化という側面が機能することを示した研究も 2 つある[35][36]。具体的には、道徳的高揚を強く感じやすい人ほど向社会的行動をとりやすいという関連は、内在化が高い人において、より顕著であった。この結果は東アジアにおいても内在化という側面が機能することを示しているが、これはあくまで「道徳的高揚が向社会的行動に及ぼす影響」つまり「感情が行動に及ぼす影響」における内在化の機能を示しているに過ぎない。前段で議論していたのは「感情が行動に及ぼす影響」ではなく「感情の喚起度」についてである。道徳的高揚の喚起度に対して、東アジアにおいては内在化ではなく象徴化が影響を及ぼすのではないかということである。中国で行われた上述の 2 つの研究では、象徴化は測定されておらず、象徴化と道徳的高揚の喚起度の関連は検討されていない。また、片方の研究では、Aquino ら[12]の結果と異なり、内在化が道徳的高揚の喚起度と関連していなかった[35]。以上より、これら 2 つの中国における研究の存在により、前段で述べた可能性がすぐさま否定されるわけではないだろう。

もう 1 つの可能性として、本研究で用いた記事の内容が影響したことが考えられる。本研究で用いた非凡善行条件の記事の内容は、Aquino ら[12]が用いた非凡善行条件の記事の内容と大きく異なっていた。そのため、これが結果に影響した可能性がある。特に、「間一髪のところで幼い子と母を救った平田さんの行動に、日本中から称賛の声があがった」という最後の一文が、内在化ではなく象徴化が機能する原因となった可能性がある。なぜならば、この文は善行に対する「他者の反応」を示す記述であるためである。すなわち、象徴化が高い人ほど自身が道徳的であることを他者に示すことに関心があるため、ある人が非凡な善行をして他者から称賛を得たという話に心を動かされたのかもしれない。これに関連する話として、Winterich ら[36]は、内在化が低く、かつ象徴化が高い人は（おそらく自身の道徳性を他者に示して自身の評価を高めるために）他者から認識される向社会的行動を行いやすいことを示している。本研究では内在化の高低にかかわらず象徴化が機能していたため、Winterich ら[37]の知見がそのまま当てはまるわけではないが、象徴化が高い人は自身の道徳性を他者に示すことに関心が高いならば、上述の可能性もありうるように思われる。

また、実験状況が影響した可能性も考えられる。明確には記載されていないが、Aquino ら[12]が行った実験はすべて、オンラインあるいは少人数の実験室で行われていたと思われる。それに対して本研究は、150 人以上がいる教場にて一斉に行われた。隣の人とは 1 席以上空けて着席するよう指示したものの、Aquino ら[12]が行った実験より、他者の存在を感じやすかったかもしれない。そしてその結果、内在化ではなく象徴化が機能したのかもしれない。

なお、内在化の平均値が高く、分散が小さかっ

た一方、象徴化の平均値が高すぎず、分散も大きかったために、内在化ではなく象徴化が機能したという可能性はあまりなさそうであると思われる。なぜならば、内在化の平均値は 4.95、標準偏差は 1.10 で、象徴化の平均値は 3.04、標準偏差は 1.05 であったためである。尺度の中点である 4 から平均までの距離は内在化も象徴化もほぼ同じで、分散も大きく変わらない。そのため、天井効果のせいで内在化ではなく象徴化が機能したという可能性は低そうであると言えるだろう。

4.2.　なぜ向社会的行動に影響しなかったのか

これについては第 1 に、本研究では非凡な善行を知らせる方法として記事を用いていたためであることが考えられる。Aquino ら[12]の Study 4 では参加者に、非凡な善行が描かれている、あるいは描かれていない約 4 分間の映像を見せていた。映像と文章では、一般的に前者の方が感情を喚起させやすいだろう。結果として、本研究では元研究ほどの強い道徳的高揚が生じておらず、向社会的行動にまでは影響しなかったのかもしれない。実際に、有意には至らなかったものの、道徳的アイデンティティが高い場合には非凡善行条件の方が向社会的行動を取りやすいという、予測と一致するパターンは見られた。また、こちらも有意には至らなかったものの、道徳的アイデンティティが高い場合には、非凡な善行の目撃が道徳的高揚を介して向社会的行動を促進するというパターンは見られた。しかし、道徳的高揚は各要素を標準化後に合算して算出しており、本研究と元研究で素得点に差があったかは確認できないため、この可能性は推測の域を出ない。

第 2 に、向社会的行動が他者から認識できるものではなかったためであることが考えられる。これは、本研究で道徳的高揚の喚起度を象徴化が調整していた理由が、象徴化が高い人ほど自身が道徳的であることを他者に示すことに関心があり、非凡な善行に対する他者からの称賛が描かれた記事に心を動かされやすかったためである場合の話である。その場合、道徳的高揚を強く感じたとしても、動機づけられるのはあくまで「他者からの称賛を得られる向社会的行動」であろう。そのため、本研究で測定した、薬物依存者の更正に貢献するオンライン調査への協力という、他者から認識されない向社会的行動には影響を及ぼさなかったのかもしれない。

4.3.　今後の展望

本研究では従来の知見[12]と異なり、道徳的アイデンティティの内在化という側面ではなく、象徴化という側面が道徳的高揚の喚起度を調整していた。1 つの可能性として、文化差が原因であることが議論されたが、本研究はこの可能性を直接的に支持する証拠を提供していない。今後の研究では、この可能性をより詳細に検証する必要があるだろう。例えば、本研究で用いた記事を用いてカナダで実験を行ってみるという方法が考えられる。カナダではやはり内在化が機能するのであれば、文化によって道徳的高揚の喚起度を調整する道徳的アイデンティティの側面が異なると結論づけられるだろう。しかし、Aquino ら[12]が用いた記事が日本人には理解しがたいと思われるように、カナダ人は本研究で用いた記事に違和感を覚えるかもしれない。そのため、日本において、文化的自己観をプライミング[38][39][40]した上で、本研究の記事を用いた実験を行ってみるのもよいかもしれない。相互独立的自己観がプライミングされた場合には内在化が機能し、相互協調的自己観がプライミングされた場合には象徴化が機能するのであれば、本研究と元研究の結果の差異は文化差が原因であるという説明の 1 つの証拠になるであろう。こうした方法を用いて、本研究と元研究の結果の差異が文化の違いによるものであるかどうかを検証することが望まれる。

ただし、象徴化が高い人ほど自身が道徳的であることを他者に示すことに関心があるため、ある人が非凡な善行をして他者から称賛を得たという話に心を動かされたという可能性も指摘された。この可能性が考えられるのは、非凡善行条件の記事の最後に「間一髪のところで幼い子と母を救った平田さんの行動に、日本中から称賛の声があがった」という一文があったためである。そのため、まずはこの一文を削除した上で本研究の追試を日本で行い、それでも象徴化が機能するのかどうかを確認してみるのもよいかもしれない。

加えて、日本においても道徳的高揚が向社会的行動を促進するのか検証することが望まれる。道徳的高揚は社会における善行の伝染を説明する独特な感情と言われている[9]。しかし、本研究では道徳的高揚が向社会的行動を促進するという結果が

得られなかった。前節で議論したように、道徳的高揚の喚起度が低かったため、向社会的行動が他者に認識されるものではなかったためという理由が考えられるため、今後の研究では、喚起度が高くなる方法（e.g., 映像）を用いた実験や、他者に認識される向社会的行動を測定する実験を行ってみるとよいかもしれない。

他には、自己愛と道徳的高揚の関連を検討してみるのもよいかもしれない。これまでの研究では、自己愛が高い人ほど道徳的アイデンティティの内在化という側面が低く[41]、道徳的高揚を感じにくいことが示されている[42]。しかし、もし本研究で象徴化が機能した理由が、象徴化が高い人ほど自身が道徳的であることを他者に示して他者からの評価を高めることに関心があるためならば、本研究の素材を用いた場合、自己愛が高い人ほど道徳的高揚を感じやすいかもしれない。なぜならば、自己愛が高い人もまた、他者からの称賛への欲求が強いためである[43]。実際に、自己愛と象徴化が正に関連することを示す研究もある[41]。そのため、本研究の素材を用いて自己愛と道徳的高揚の関連を検討することで、自己愛と道徳的高揚が正に関連する場合があることが示され、自己愛と道徳的高揚の関連が非凡な善行の描かれ方によって調整される可能性が示唆されるかもしれない。

最後に、道徳的高揚についての研究文脈からは外れるが、非凡善行条件における記事内の援助者に対する印象を測定する研究を行ってみるのもよいかもしれない。本研究の非凡善行条件の記事は、自身の命の危険を顧みず、線路にいる電車に轢かれそうな人を救助するという内容であった。この記事が道徳的高揚というポジティブな感情を喚起させるだろうと考えて実験を行い、実際に喚起させていた。しかし近年、このような行動は「過剰な援助」と知覚され、このような行動を取る者はネガティブに評価されることも示されている[44] [45]。例えば志澤ら[44]は、ホームから線路に転落した女性を通りかかった男性が線路に飛び降り救助したというシナリオを参加者に提示し、援助者である男性の印象を測定した。その際、その時すでに緊急停止ボタンが押され、次の電車はホームに入ってこないことを構内のアナウンスが告げていたことが描写される通常援助条件と、その時すでにホームから見えるほど次の電車が近づいていたことが描写される過剰援助条件があった。分析の結果、過剰援助条件の方が通常援助条件より、援助者である男性の印象が悪かった。本研究で用いた非凡善行条件の記事に描かれている男性が取った行動は、志澤ら[44]の研究でいうところの過剰援助条件における援助行動である。ということは、本研究では道徳的高揚は生じていたものの、援助者の男性はネガティブに知覚されていたのだろうか。

いくつかの理由から、おそらくそうではないと考えられる。第 1 に、本研究では命の危険を冒してまで援助するに至る妥当な理由が、描写から読み取れるためである。志澤ら[44]の研究において、過剰援助条件の方が通常援助条件より援助者である男性の印象が悪かった主な理由は、「男性の行動が異常・常識外れだと感じたから」であった。参加者がそのように感じた大きな理由はおそらく、一般的に、線路に転落した人を見かけた際にすぐさま線路に立ち入り救助をすることは非常識であると理解されているためであろう。実際に、鉄道会社の案内では、そのような緊急事態の際には非常停止ボタンを押して係員に知らせることが推奨されており、その後、駅社員が駆けつけることを説明しているところもある[46]。志澤ら[44]の過剰援助条件シナリオは非常に短く、細かい描写はないため、また、駅には他にも大勢の人がいると描写されていたにもかかわらず、援助者以外の人も援助行動をとった、あるいはとろうとしていたことが描写されていなかったため、一般的に考えて、援助者の行動は非常識であると思われたのであろう。他方、本研究では、やむをえずとっさに線路に立ち入って救助をしなければならない状況（e.g., 非常停止ボタンを押しても間に合わない, 閑散とした駅で人がいない, 線路内の女性は恐怖のあまり動けない）が描写されていた。加えて、援助者が援助時に知っていたわけではないものの、被援助者である女性が急いで踏み切りを渡ろうとせざるをえなかった同情すべき理由も描かれていた。そのため、一般的には自ら線路に入って救助を行うことは推奨されない行為であるものの、この場面では妥当な援助と理解されていたと思われる。

第 2 に、志澤ら[44]の研究では全参加者に、先に通常援助条件のシナリオを読んで援助者の印象を評定してもらい、次に過剰援助条件のシナリオを読んで援助者の印象を評定してもらっていたためである。先に通常援助条件のシナリオを読んでおり、線路に倒れた人を見かけた際に一般的に取る

べき行動（e.g., まずは非常停止ボタンを探して押す）を想起した状態で過剰援助条件のシナリオを読んだため、余計に、線路に立ち入り他者を救助するという行動が非常識に感じられたのであろう。そのため、そのような手続きをとっていなかった本研究では、志澤ら[44]の研究より、援助が非常識であったとは思われにくかったと考えられる。

以上の理由から、本研究の非凡善行条件の記事で描かれた援助は、参加者に非常識であるとは思われていなかったと考えられる。結果として、参加者は記事内の男性に対してネガティブな印象を抱いていなかったと思われる。しかし、実際にそうであったかどうかは、本研究からはわからない。今後の研究では、これを確かめてみるのもよいかもしれない。こうした研究は、援助が過剰とみなされ、援助者がネガティブに評価されるかどうかは、必ずしも行動内容で決まるわけでなく、文脈に依存することを示すことに繋がるかもしれない。

なお、本研究のように非凡な善行を描写した記事を参加者に読んでもらう場合は、ただ文章を提示するだけでなく、実際の新聞記事のような見た目にした方がよいかもしれない。なぜならば、非凡な善行は非凡であるがゆえに嘘の作り話のように思われてしまう可能性があるためである。本研究では、実験に懐疑的なコメントを記述した 3 名を分析から除外することとなったが、この 3 名も記事を嘘であると感じていたかもしれない。また、道徳的高揚を測定する際に用いる尺度の「よりよい人間になりたいという欲求」に関する項目は、社会的望ましさの影響を受ける可能性がある。今後の研究では、社会的望ましさも測定して、分析の際には統制するなどの対応をするとよいかもしれない。

謝辞

本研究は著者の指導のもと、一橋大学社会学部の木川遥氏と藤井宥理氏が卒業論文研究として実施した実験です。両氏に深く感謝します。

引用文献

[1] 朝日新聞（2011）．タイガーマスク運動？相次ぐ贈り物、広がる共感　1 月 11 日朝刊，35.

[2] Baddoo, T. (2024). *Celebrate the power of good deeds on National Random Acts of Kindness Day*. USA Today. Retrieved May 18, 2024, from https://www.usatoday.com/story/life/humankind/2024/02/17/watch-a-random-act-of-kindness-make-the-world-a-better-place/72613590007/

[3] The Random Acts of Kindness Foundation (n.d.). *Kindness starts with one*. https://www.randomactsofkindness.org/kindness-stories/

[4] Haidt, J. (2000). The positive emotion of elevation. *Prevention & Treatment*, *3*(1), Article 3c. https://doi.org/10.1037/1522-3736.3.1.33c

[5] Algoe, S. B., & Haidt, J. (2009). Witnessing excellence in action: The ‘other-praising’ emotions of elevation, gratitude, and admiration. *The Journal of Positive Psychology, 4*(2)*,* 105-127. https://doi.org/10.1080/17439760802650519

[6] Haidt, J. (2003a). Elevation and the positive psychology of morality. In C. Keyes & J. Haidt (Eds.), *Flourishing: Positive Psychology and the Life Well-lived* (*pp.* 275-289). Washington, DC: American Psychological Association. https://doi.org/10.1037/10594-012

[7] Haidt, J. (2003b). The moral emotions. In R. Davidson, K. Scherer, & H. Goldschmith (Eds.), *Handbook of Affective Sciences* (*pp.* 852-870). Oxford, United Kingdom: Oxford University Press.

[8] Oliver, M. B., Ash, E., & Woolley, J. K. (2012). The experience of elevation: Responses to media portrayals of moral beauty. In R. Tamborini (Ed.), *Media and the Moral Mind* (*pp.* 93-108). New York, NY: Routledge.

[9] Sparks, A. M., Fessler, D. M., & Holbrook, C. (2019). Elevation, an emotion for prosocial contagion, is experienced more strongly by those with greater expectations of the cooperativeness of others. *PloS ONE*, 14(12), e0226071. https://doi.org/10.1371/journal.pone.0226071

[10] Schnall, S., & Roper, J. (2012). Elevation puts moral values into action. *Social Psychological & Personality Science, 3*(3)*,* 373-378. http://dx.doi.org/10.1177/1948550611423595

[11] Schnall, S., Roper, J., & Fessler, D. M. T. (2010). Elevation leads to altruistic behavior. *Psychological Science, 21*(3), 315-320. http://dx.doi.org/10.1177/0956797609359882

[12] Aquino, K., McFerran, B., & Laven, M. (2011).

Moral identity and the experience of moral elevation in response to acts of uncommon goodness. *Journal of Personality and Social Psychology, 100*(4), 703-718. https://doi.org/10.1037/a0022540

[13] Siegel, J. T., Thomson, A. L., & Navarro, M. A. (2014). Experimentally distinguishing elevation from gratitude: Oh, the morality. *The Journal of Positive Psychology*, *9*(5), 414-427. http://dx.doi.org/10.1080/17439760.2014.910825

[14] Thomson, A. L., & Siegel, J. T. (2013). A moral act, elevation, and prosocial behavior: Moderators of morality. *The Journal of Positive Psychology, 8*(1), 50-64. http://dx.doi.org/10.1080/17439760.2012.754926

[15] Siegel, J. T., Navarro, M. A., & Thomson, A. L. (2015). The impact of overtly listing eligibility requirements on MTurk: An investigation involving organ donation, recruitment scripts, and feelings of elevation. *Social Science & Medicine*, *142*, 256-260. http://dx.doi.org/10.1016/j.socscimed.2015.08.020

[16] Sakai, J. T., Dalwani, M. S., Mikulich-Gilbertson, S. K., McWilliams, S. K., Raymond, K. M., & Crowley, T. J. (2016). A behavioral measure of costly helping: Replicating and extending the association with callous unemotional traits in male adolescents. *PLoS ONE*, *11*(3), e0151678. http://dx.doi.org/10.1371/journal.pone.0151678

[17] Pohling, R., & Diessner, R. (2016). Moral elevation and moral beauty: A review of the empirical literature. *Review of General Psychology*, *20*(4), 412-425. https://doi.org/10.1037/gpr0000089

[18] Algoe, S. B. (2012). Find, remind, and bind: The functions of gratitude in everyday relationships. *Social and Personality Psychology Compass*, *6*(6), 455-469. https://doi.org/10.1111/j.1751-9004.2012.00439.x

[19] Piff, P. K., Dietze, P., Feinberg, M., Stancato, D. M., & Keltner, D. (2015). Awe, the small self, and prosocial behavior. *Journal of Personality and Social Psychology*, *108*(6), 883-899. https://doi.org/10.1037/pspi0000018

[20] Haidt, J. (2005). Disgust and elevation: Opposing sources of "spiritual information." In C. L. Harper, Jr., (Ed.), *Spiritual information: 100 perspectives* (pp. 424-428). Philadelphia, PA: Templeton Foundation Press.

[21] 松尾朗子・田中友理 (2021). 道徳判断と嫌悪感情－神性・清浄基盤に着目して－. エモーション・スタディーズ, *7*(1), 13-24.

[22] Blasi, A. (1984). Moral identity: Its role in moral functioning. In W. Kurtines & J. Gewirtz (Eds.), *Morality, Moral Behavior, and Moral Development* (*pp.* 128-139). New York, NY: Wiley.

[23] Aquino, K., & Reed, A., II. (2002). The self-importance of moral identity. *Journal of Personality and Social Psychology, 83*(6), 1423-1440. https://doi.org/10.1037/0022-3514.83.6.1423

[24] Reed, A., II, Aquino, K., & Levy, E. (2007). Moral identity and judgments of charitable behaviors. *Journal of Marketing, 71*(1), 178-193. https://doi.org/10.1509/jmkg.71.1.178

[25] Morales, A. C. (2005). Giving firms an "E" for effort: Consumer responses to high effort firms. *Journal of Consumer Research*, *31*(4), 806-812. https://doi.org/10.1086/426615

[26] Preacher, K. J., Rucker, D. D., & Hayes, A. F. (2007). Addressing moderated mediation hypotheses: Theory, methods, and prescriptions. *Multivariate Behavioral Research*, *42*(1), 185-227. https://doi.org/10.1080/00273170701341316

[27] 河村悠太・石黒翔・西端和志・星野春香・山下環奈・渡邊智也・楠見孝（2017）. 日本語版道徳アイデンティティ尺度作成と妥当性の検討. 日本心理学会第 81 回大会発表論文集，118.

[28] 佐藤徳・安田朝子（2001）. 日本語版 PANAS の作成. 性格心理学研究，*9*(2)，138-139. https://doi.org/10.2132/jjpjspp.9.2_138

[29] Hayes, A. F. (2017). *Introduction to mediation, moderation, and conditional process analysis: A regression-based approach*. Guilford Press.

[30] 清水裕士（2016）. フリーの統計分析ソフト HAD：機能の紹介と統計学習・教育，研究実践における利用方法の提案. メディア・情報・コミュニケーション研究, *1*, 59-73.

[31] Markus, H. R., & Kitayama, S. (1991). Culture and

the self: Implications for cognition, emotion, and motivation. *Psychological Review*, *98*(2), 224-253. https://doi.org/10.1037/0033-295X.98.2.224

[32] Markus, H. R., & Kitayama, S. (2010). Cultures and selves: A cycle of mutual constitution. *Perspectives on Psychological Science, 5*(4), 420-430. https://doi.org/10.1177/1745691610375557

[33] Curhan, K. B., Levine, C. S., Markus, H. R., Kitayama, S., Park, J., Karasawa, M., ... & Ryff, C. D. (2014). Subjective and objective hierarchies and their relations to psychological well-being: A US/Japan comparison. *Social Psychological and Personality Science*, *5*(8), 855-864. https://doi.org/10.1177/1948550614538461

[34] Park, J., Kitayama, S., Markus, H. R., Coe, C. L., Miyamoto, Y., Karasawa, M., ... & Ryff, C. D. (2013). Social status and anger expression: The cultural moderation hypothesis. *Emotion*, *13*(6), 1122-1131. https://doi.org/10.1037/a0034273

[35] Ding, W., Shao, Y., Sun, B., Xie, R., Li, W., & Wang, X. (2018). How can prosocial behavior be motivated? The different roles of moral judgment, moral elevation, and moral identity among the young Chinese. *Frontiers in psychology*, *9*, 814. https://doi.org/10.3389/fpsyg.2018.00814

[36] Fang, S., & Huang, M. (2023). Relationship between moral elevation and prosocial behavior among college students: the mediating role of perceived social support and moderating role of moral identity. *International Journal of Mental Health Promotion*, *25*(3), 343-356. https://doi.org/10.32604/ijmhp.2023.027442

[37] Winterich, K. P., Aquino, K., Mittal, V., & Swartz, R. (2013). When moral identity symbolization motivates prosocial behavior: The role of recognition and moral identity internalization. *Journal of Applied Psychology, 98*(5), 759-770. https://doi.org/10.1037/a0033177

[38] Brewer, M. B., & Gardner, W. (1996). Who is this "We"? Levels of collective identity and self representations. *Journal of Personality and Social Psychology, 71*(1), 83-93. https://doi.org/10.1037/0022-3514.71.1.83

[39] Gardner, W. L., Gabriel, S., & Lee, A. Y. (1999). "I" value freedom, but "We" value relationships: Self-construal priming mirrors cultural differences in judgment. *Psychological Science*, *10*(4), 321-326. https://doi.org/10.1111/1467-9280.00162

[40] Trafimow, D., Triandis, H. C., & Goto, S. G. (1991). Some tests of the distinction between the private self and the collective self. *Journal of Personality and Social Psychology, 60*(5), 649-655. https://doi.org/10.1037/0022-3514.60.5.649

[41] Hart, W., Tortoriello, G. K., & Richardson, K. (2019). Feeling good about oneself heightens, not hinders, the goodness in narcissism. *Current Psychology*, *38*, 1399-1408. https://doi.org/10.1007/s12144-018-9993-5

[42] Thomson, A. L. (2017). *Promoting Positive Elevating Experiences for People with Varying Individual Characteristics*. Doctoral dissertation, Claremont Graduate University, Claremont, CA.

[43] Raskin, R., & Terry, H. (1988). A principal-components analysis of the narcissistic personality inventory and further evidence of its construct validity. *Journal of Personality and Social Psychology*, *54*(5), 890-902. https://doi.org/10.1037/0022-3514.54.5.890.

[44] 志澤翔太郎・川上直秋・宮本聡介（2023）．過剰な援助を行う者が与える印象―第三者視点からの検討．パーソナリティ研究, *32*(1), 1-10. https://doi.org/10.2132/personality.32.1.1

[45] 山本佳祐・池上知子（2019）．第三者が援助者に自己呈示動機を推測するメカニズム．人文研究, *70*, 91-112.

[46] JR東日本 (n.d.). JR東日本なるほどQ&A Guide. https://www.jreast.co.jp/saferelief/operationguide/pdf/emergency.pdf

Abstract

Moral elevation is evoked when individuals witness acts of uncommon moral goodness. It is considered a unique emotion that underlies prosocial contagion, as it promotes prosocial behavior. However, to date, there has been no quantitative research on moral elevation in Japan. Therefore, I conducted a conceptual replication study of Study 4 of Aquino et al. (2011), which examined both the moderator of the experience of elevation and the effect of elevation on prosocial behavior, in Japan. Consistent with the original research, moral identity moderated the experience of moral elevation. Specifically, the tendency for witnessing acts of uncommon goodness to evoke moral elevation was pronounced among individuals with high moral identity. However, contrary to the original research, it was the symbolization (reflecting the degree to which moral traits manifest publicly through a person's actions), rather than the internalization (reflecting the degree to which moral traits are deeply rooted in the self-concept), that moderated the experience of moral elevation. In addition, witnessing acts of uncommon goodness did not affect prosocial behavior via moral elevation. Based on cultural models of the self, I discuss the possibility that symbolization moderates the experience of moral elevation in Japan. However, it is also possible that the differences in materials or experimental situations caused the divergent results from the original study. Regarding the null effect on prosocial behavior, I discuss the possibility that participants did not experience elevation as strongly as the original study and that the method used to measure prosocial behavior was inadequate. Future research directions are discussed.

（受付日：2024 年 5 月 19 日，受理日：2024 年 12 月 3 日）

竹部　成崇（たけべ　まさたか）
現職：大妻女子大学文学部コミュニケーション文化学科 専任講師

プロフィール：
1988 年東京都生まれ。一橋大学大学院社会学研究科博士後期課程修了。博士（社会学）。一橋大学大学院社会学研究科ジュニアフェロー（特任講師）を経て、現職に至る。国立台湾大学心理学科客員研究員（2024 年～2025 年）。専門は社会心理学。社会問題・社会現象の背後にある心の働きについて、実験や調査で取得した量的データの分析を通じて研究している。

主な著書：
Takebe, M., & Nakashima, K. (in press). Testing the mediating role of zero-sum beliefs in the effect of resource scarcity on out-group exclusion/un-inclusion. *Japanese Psychological Research.*
Takebe. M., Tsumura. K., & Nakashima. K. (2023). Resource scarcity priming and face perception: A preregistered conceptual replication of Study 1 of Rodeheffer et al. (2012) in Japan. *Current Research in Ecological and Social Psychology*, *5*, 100169.
竹部成崇 (2021). なぜ貧しい人ほど寄付をするのかー金銭的欠乏感と利他的動機づけが寄付意図に及ぼす影響ー. コミュニケーション文化論集, 19, 23-54.
竹部成崇 (2020). 貧しさと寄付のパラドクスに対する新たな視点ー金銭的欠乏感が他者の苦境の原因を金銭の少なさに帰属させる傾向を強めるー. コミュニケーション文化論集, 18, 65-85.